

第 2 章

食をめぐる現状と課題

- 1 食をめぐる現状
- 2 前計画の評価と課題の整理



1 食をめぐる現状

豊田市では、平成 19 年度に 20 歳以上の市民と高校生を対象とした「食育に関するアンケート調査」、小中学生を対象とした「食生活状況調査」を実施し、目標値の設定等を行いました。

計画の見直しにあたり、目標値の達成状況や、市民の食生活における現状・課題を整理するため、平成 22 年度に同様の調査を実施し、目標ごとに整理しました。

食育に関するアンケート調査

市民	調査時期	平成 22 年 6 月
	担当課	福祉保健部 健康増進課
	調査対象	無作為抽出による市内在住の 20 歳以上の男女
	調査方法	郵送配布・回収
	サンプル	2,500 サンプル
	回収数	1,210 件
	回収率	48.4%

高校生	調査時期	平成 22 年 6 月
	担当課	福祉保健部 健康増進課
	調査対象	市内全県立高校の 2 年生 1 クラス
	調査方法	直接配布・回収
	回収数	394 件

高校生の平成 19 年度調査については、無作為抽出による郵送配布・回収

食生活状況調査

小中学生	調査時期	平成 22 年 7 月
	担当課	教育委員会 保健給食課
	調査対象	全小学校の 3 年生、5 年生各 1 クラス 全中学校の 2 年生 1 クラス
	調査方法	直接配布・回収
	回収数	4,000 件

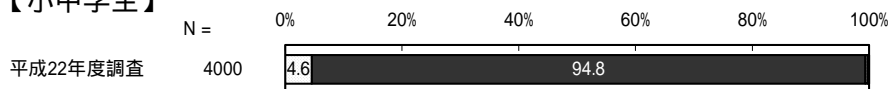
(1) 子どもとはぐくむ「楽しい食育」の現状

食を通じた家族団らんの機会

・朝食と夕食をひとりで食べる割合は、小中学生に比べ高校生が多い

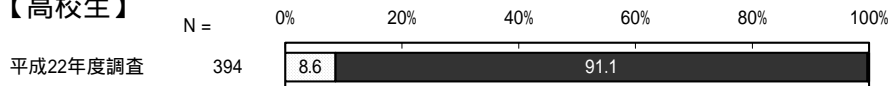
朝食・夕食を誰と食べるか

【小中学生】



朝食と夕食をひとりで食べる小中学生は4.6%

【高校生】



朝食と夕食をひとりで食べる高校生は8.6%

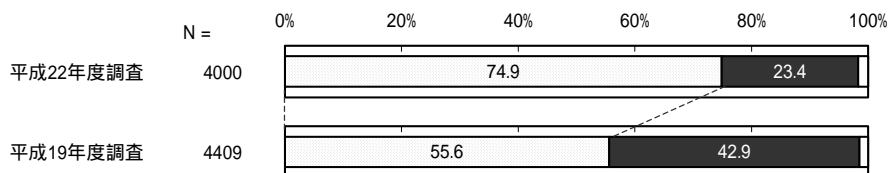
□ひとりで ■家族などの誰かと食べた □その他 □無回答

食にかかわる体験活動

・農作業体験をしたことがある小中学生は7割強
 ・前回調査に比べ農作業体験をしたことがある小中学生は大幅に増加

農作業体験の有無

【小中学生】



農作業体験をしたことがある小中学生は74.9%

前年に比べ19.3ポイント増加

□ある ■ない □無回答

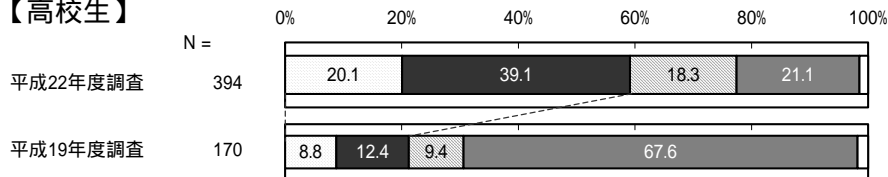
(2) みんなで参加「交流食育」の現状

地産地食

- ・地産地食の認知度は高校生で約6割、20歳以上の市民で6割強
- ・前回調査に比べ、認知度は大幅に増加

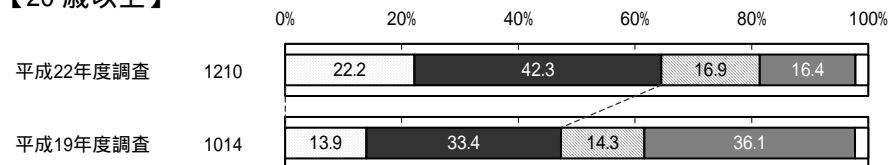
地産地食の認知度

【高校生】



地産地食を知っている高校生は59.2%
前回に比べ38.0ポイント増加

【20歳以上】



地産地食を知っている20歳以上は64.5%
前回に比べ17.2ポイント増加

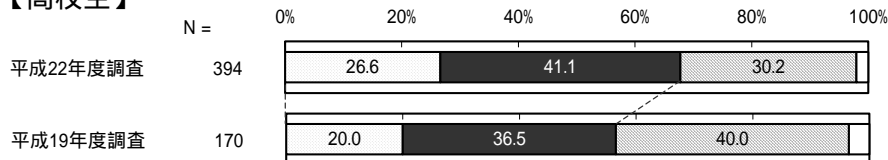
- よく内容を知っている
- だいたい内容を知っている
- ▨内容はあまり知らないが、言葉は聞いたことがある
- はじめて聞いた
- 無回答

地域の伝統食や郷土食

- ・地域の伝統食や郷土食の認知度は高校生で約7割、20歳以上の市民で約2割
- ・前回調査に比べ、高校生は増加

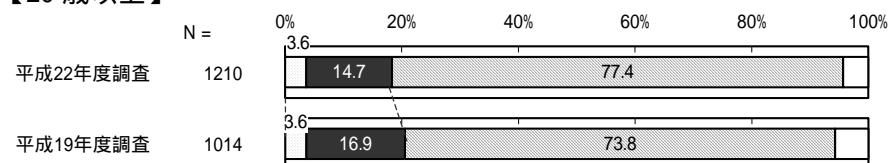
地域の伝統食や郷土食の認知度

【高校生】



伝統食や郷土食を知っている高校生は67.7%
前回に比べ、11.2ポイント増加

【20歳以上】



伝統食や郷土食を知っている20歳以上は18.3%
前回と同程度

- 知っている
- だいたい知っている
- ▨知らない
- 無回答

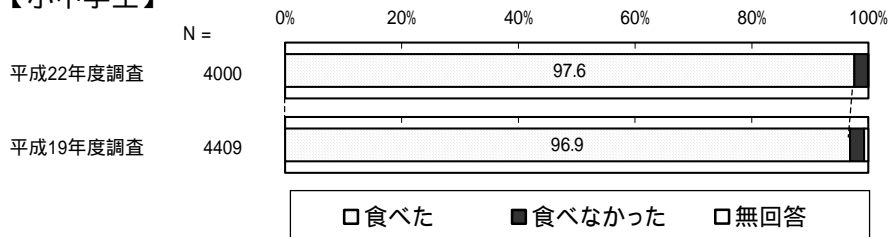
(3) 3食たべて「健康食育」の現状

朝食の摂取状況

- ・朝食の摂取は、小中学生で増加。高校生では大幅に減少
- ・高校生の朝食の欠食が目立つ

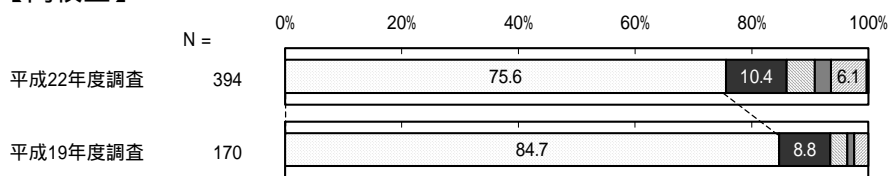
朝食の摂取状況

【小中学生】



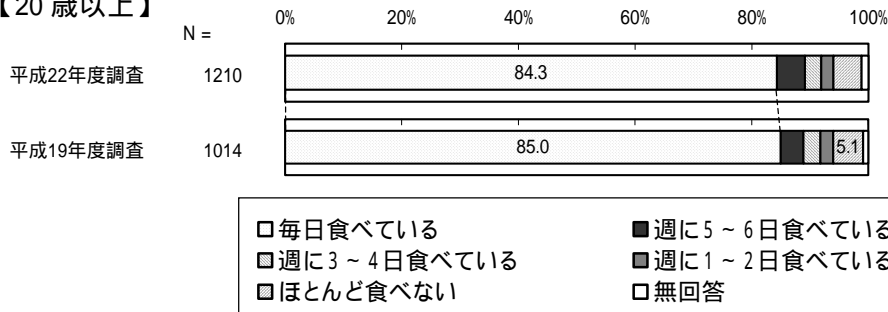
朝食を食べている小中学生は97.6%
前年に比べ0.7ポイント増加

【高校生】



朝食を毎日食べている高校生は75.6%
前年に比べ9.1ポイント減少

【20歳以上】

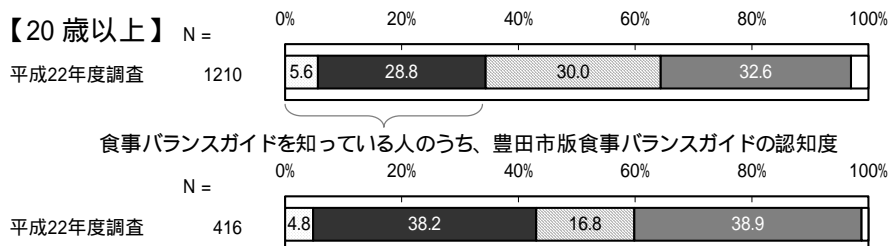


朝食を毎日食べている20歳以上は84.3%
前回と同程度

食事バランスガイド

- ・食事バランスガイドの認知度は、20歳以上の市民で3割強
- ・豊田市版食事バランスガイドの認知度は1割強

食事バランスガイドの認知度



食事バランスガイドを知っている20歳以上は34.4%
そのうち、豊田市版食事バランスガイドを知っている人は、43.0% (全体では14.8%)

- よく内容を知っている
- 内容はあまり知らないが、言葉は聞いたことがある
- 無回答
- だいたい内容を知っている
- はじめて聞いた

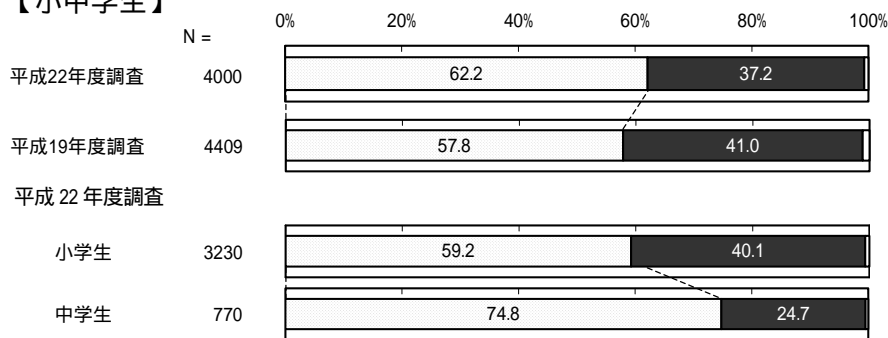
(4) 食育の認知の現状

「食育」という言葉の認知度

・「食育」という言葉の認知度は、小中学生、高校生で増加

「食育」の認知度

【小中学生】

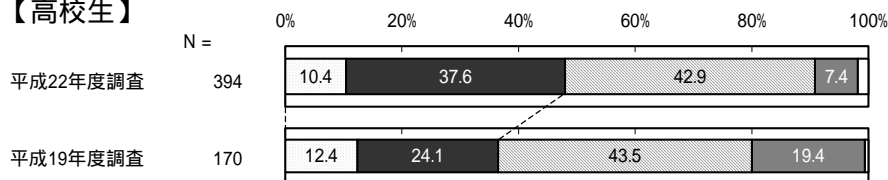


「食育」を聞いたことがある小中学生は62.2%
前回に比べ4.4ポイント増加

小学生に比べ中学生で「食育」を聞いたことがある人が多い

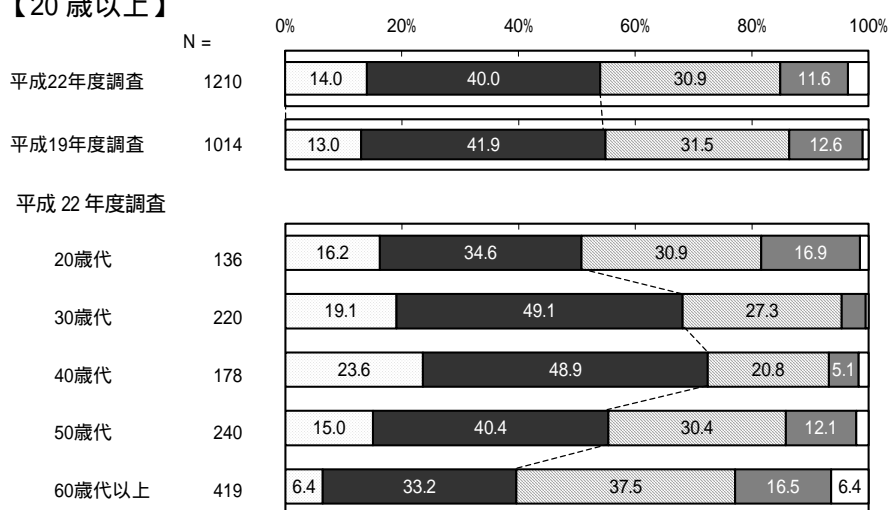
□聞いたことがある ■聞いたことがない □無回答

【高校生】



「食育」について知っている高校生は48.0%
前回に比べ11.5ポイント増加

【20歳以上】



「食育」について知っている20歳以上は54.0%
前回と同程度

30歳代、40歳代で「食育」について知っている人が多い

□よく内容を知っている
■だいたい内容を知っている
□内容はあまり知らないが、言葉は聞いたことがある
■はじめて聞いた
□無回答

2 前計画の評価と課題の整理

前計画では食育を推進するねらいを「人づくり」と「まちづくり」の2つの視点に集約し、計画の柱となる3つの目標（目標1 子どもとはぐくむ「楽しい食育」、目標2 みんなで参加「交流食育」、目標3 3食たべて「健康食育」）達成に向けて関連事業として79事業、重点事業として11事業に取り組んできました。

計画に掲げた目標指標に対する達成状況や市の取組の成果を踏まえ、前計画の評価と課題を整理します。

前計画における目標値の達成状況

指標名		当初値（H19）	H22	目標値	
(1)	家族の誰かと一緒に食事（朝食）をする子の増加（朝食を食べている人のうち）	高校生	66.3%	48.2%	75.0%
		小中学生	73.6%	73.7%	80.0%
(2)	毎日の食事が楽しいと思う人の増加	市民	76.4%	77.5%	80.0%
		高校生	64.6%	65.2%	70.0%
	給食の時間が楽しいと思う子の増加	小中学生	73.3%	76.7%	75.0%
(3)	学校以外で農作業体験をする子の増加	小中学生	55.6%	74.9%	60.0%
(4)	地産地食の内容を知っている人の増加	市民	47.3%	64.5%	60.0%
		高校生	21.2%	59.2%	30.0%
	給食に地域の食材が使われていることを知っている子の増加	小中学生	54.3%	50.2%	65.0%
(5)	地域の伝統食や郷土食を知っている人の増加	市民	20.5%	18.3%	30.0%
		高校生	56.5%	67.8%	60.0%
		小中学生	87.3%	82.7%	90.0%
(6)	食材の廃棄や食べ残しを少なくするようにしている人の増加	市民	80.3%	82.3%	90.0%
(7)	毎日朝食を食べる人の増加	市民	85.0%	84.3%	90.0%
		高校生	84.7%	75.6%	90.0%
	朝食を食べた子の増加（ある一日）	小中学生	96.9%	97.6%	98.0%
(8)	バランスのとれた食事をする人の増加	市民	72.0%	69.6%	80.0%
(9)	メタボリックシンドロームの内容を知っている人の増加	市民	70.2%	83.1%	80.0%
(10)	よくかんで食べる人の増加	市民	40.8%	39.6%	50.0%
		高校生	39.4%	38.8%	50.0%
(11)	食の安全について関心のある人の増加	市民	86.8%	87.3%	90.0%
(12)	食育について知っている人の増加	市民	54.9%	54.0%	70.0%
		高校生	36.5%	48.0%	60.0%
		小中学生	57.8%	62.2%	70.0%

(1) 子どもとはぐくむ「楽しい食育」

子どもの食を中心として26事業(うち重点事業 5事業)に取り組みました。また、重点事業では、「おいしく楽しい食育」プロジェクトとして、体験活動を中心とした事業に取り組み、子どもへの食育を推進してきました。こうした中、農作業体験をした子どもは大幅に増加しており、食育について、楽しく学び、体験できる機会を確保できたと考えられます。

家族や友だちと楽しく食事をするを通じた、子どものころから望ましい食習慣を身につけることができるよう、「交流館講座(食育に関する講座)」や「園児・保護者向け食育講座(ぱくぱく教室)」など啓発事業に取り組んできました。

その結果、家庭における孤食の状況をみると、朝食において、小中学生では孤食は少ない状況となっています。一方、高校生においては、朝食における孤食が目立っています。

また、できるだけ家族そろって食事をするようにしている人は6割程度となっていますが、子どもへの食育について大切なこととして「家族や友人と一緒に楽しく食べる」と回答した人が前回調査より大きく減少しており、家族団らんの食事の重要性に対する意識が薄れている傾向にあります。

園や学校においては、「園における食育計画策定」、「子どもへの指導の充実」、「授業参観や学校行事による啓発」などの取組を中心に子どもに対する食育を推進してきました。

しかし、食育を行う場として家庭と答えた人は、前回調査より大きく減少しており、園や学校等へ依存する傾向がみられます。

そのため、園や学校での食育の取組とあわせ、再度、身近な家庭が食育の中心であることを意識し、食育を推進することが重要です。

- ・家族団らんの食事の重要性の啓発を行う必要がある。
- ・身近な家庭における食育の実践を推進する必要がある。
- ・園や学校での食育の取組が進められており、今後もさらなる充実が求められている。

(2) みんなで参加「交流食育」

地産地食、食を通じた交流を中心として 13 事業(うち重点事業 3 事業)に取り組みました。豊田市では、地産地消を独自に「地産地食」という言葉を使用し、地域の食材を地域で食べるよう強調しました。

そのほか、「園と地域住民(高齢者など)の交流事業における食育活動の実施」や「わくわく事業」など食を通じた世代間交流や都市と農山村部の交流を促す機会づくりを行ってきました。

また、「みんなで交流食育」プロジェクトとして、地産地食を中心とした重点事業に取り組む中、認知度は大幅に増加しており、啓発が進んでいます。

園や学校においては、「学校給食による地産地食の推進」や「学校給食で行事食の実施」など学校給食時に伝統食を始め全国の郷土食を実施することにより、地域の伝統食や郷土食の認知度は、小中学生では 8 割を超え、高校生は増加しています。

しかし、20 歳以上の市民では大きな変化がみられず、伝統食や郷土食に関する伝承が重要です。

さらに、食と地球環境への配慮が求められる中、食を通じて環境を考え、環境にやさしい生活ができるよう「環境学習施設(エコット)を中心とした環境学習」(重点事業)などの教育や「学校給食残菜ゼロ運動の推進」などの啓発を行ってきました。

また、レジ袋の有料化に伴い、マイバッグを持参している人の割合は大幅に増加しています。

しかし、食材の廃棄や食べ残しを少なくするようにしている人は微増となっており、今後も食生活において、食べ残しや食べないで捨てられる食品、包装容器の廃棄による環境への負荷などへの配慮が求められます。

- ・「地産地食」の認知度は高まっている中、産地直売所との連携など地元産の食材を積極的に購入し食べることを進める必要がある。
- ・学校給食等を通じて、伝統食や郷土食を提供しているが、20 歳以上で認知度が低く、伝統食や郷土食の伝承が重要である。
- ・マイバッグを持参する人が増加するなど環境に対する意識が高まっており、今後も環境に配慮した食生活の実践が求められる。

(3) 3 食たべて「健康食育」

健康的な食生活に視点を置き 40 事業（うち重点事業 3 事業）に取り組みました。また、重点事業では「健康づくり食育」プロジェクトとして、豊田市版食事バランスガイドの普及や「かみかみ運動の推進」によりかむことの重要性の啓発などに努めてきました。栄養バランスのとれた食事を意識している人については、前回同様、約 7 割となっているものの、食事バランスガイド¹の認知度は低く、意識とは裏腹に行動に結びついていないことが伺えます。よくかんで食べる人については、前回同様、約 4 割となっており、今後も、かむことの大切さを周知していくことが大切です。

朝食の摂取状況についてみると、「朝食啓発イベント」や『『早寝早起き朝ごはん』運動の推進』などにより、小中学生における朝食の摂取率は 9 割以上となっており、朝食摂取に対する効果が表れたことが伺えます。朝食を欠食する人は、高校生において大幅に増加しており、若い年代を中心に、朝食の摂取を促すことが大切です。

また、特定健診や特定保健指導がスタートし、メタボリックシンドローム²の認知度や、「へその周りの太さが気になる人」は大幅に増加しました。メタボリックシンドロームや生活習慣病に関する知識や意識は高まりを見せており、今後は、食生活を中心に、運動などとあわせたメタボリックシンドロームや生活習慣病の予防に関する取組を日頃の生活の中で行っていくことが大切です。

さらに、近年、様々な食の安全に関する問題が発生し、食の安全に関する意識は、前回同様に高い意識となっています。「食品の安全・安心を語る懇談会」などを実施し、事業者が食品の安全性について正しく情報提供するよう働きかけを行うとともに、市民がその情報を正しく理解できる知識を養えるよう取組を行っており、人々の健康に大きな影響を及ぼす食の安全は、今後も重要な課題となっています。

- ・朝食を欠食する人は、高校生が大幅に増加しており、子どものころから、食を大切に生活リズムを整え、朝食をきちんと食べるよう啓発する必要がある。
- ・食事バランスガイドの認知度が低く、豊田市版食事バランスガイドの普及啓発が重要である。
- ・よくかんで食べる人の割合が低く、かむことの重要性を啓発する必要がある。

1 食事バランスガイドとは、1 日に「何を」「どれだけ」食べたらよいかの目安を分かりやすくコマの形のイラストで示したものです。

2 「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」とは、内臓脂肪による肥満の人（腹囲＝へその位置で測定した腹囲、男性 85 cm 以上・女性 90 cm 以上）が「糖尿病」「高血圧」「脂質異常症」といった生活習慣病の危険因子を複数合わせもった状態のことで、動脈硬化を進行させてしまいます。

(4) 食育の推進

市民と行政がそれぞれの立場で行動し、食育を共働して進めていくため、「食育キャラクター『たべまる』の作成」、「食育ホームページによる情報提供」、「食育月間・食育の日普及啓発」、「食育フェスタの開催」など様々な啓発や情報提供を行ってきました。

しかし、食育について知っている人は、小中学生、高校生において増加したものの、20歳以上では前回同様となっており、20歳以上の市民に対し、食への関心を高め、食育を推進する必要があります。

一方で、「食育応援し隊」や「食育人材バンク」などを整備し、食育推進のための仕組みづくりは構築できたと考えられます。

- ・小中学生、高校生における食育の認知度は増加したものの、20歳以上では大きな変化がないため、20歳以上の市民に対し食育の普及啓発を行う必要がある。